

ラテンアメリカの文書主義

ラテンアメリカへ調査に行くたび、いつも頭を悩まされる問題がある。調査に伴う各種の書類手続きである。

●煩雑な手続き

手続きの種類は多い。出入国関連はもとより、ワールドワークをするなら公的機関や自治組織の許可を得る必要があるし、図書館・文書館を利用するなら利用者証を申請する必要がある。標本資料の収集の場合、手続きはさらに複雑である。通常の輸出入の手続きに加えて、文化財や野生動物植物を管轄する公的機関と交渉し、資料をもち出す許可を得なければならぬ。以前、ボリビアで標本資料を収集したとき、この手続きに一年以上要したことがある。

●ペルーへの出張

昨年からペルーに長期出張しているが、書類手続きはやはり頭痛のたねである。出国の数日前に査証を取得できたのは天恵だったが、その延長手続きに時間がかかり、とうとう有効期限が切れてしまった。受入先の大学から、査証を更新中であることを証明する書類を発行してもらい、事なきを得たが、かなりひやひやさせられた。

図書館・文書館の利用手続きも侮

れない。ある文書館で史料の閲覧許可を求めたところ、必要書類を聞かされて、やる気がなえてしまった。利用許可願、調査計画書、パスポート、公証人が認証したそのコピー、所属機関からの紹介状、日本大使館からの紹介状、云々。大使館から一筆をえるだけでも、長期間の事前準備と書類の束と粘り強い交渉が必要となるだろう。

●文書主義とその抜け道

事実確認や意思決定、通達や指令などを文書を介しておこなおうとする姿勢を、社会学では文書主義とよぶ。本来、作業の効率と精度を高め、公平さを確保するための措置なのだ。自己目的化し、繁文縟礼はんぶんじゆくれいに墮する危険がある。ラテンアメリカの公



ペルーの首都リマ

的機関はこの文書主義にとりつかれているように思われるが、にもかかわらず日々の業務が進むのは、抜け道があるからである。書類へのこだわりは、じつはその軽視と対になっている。書類はたしかに必要なだが、それがなければお手上げというわけではない。交渉次第で道は開けるのである。やり方はさまざまだが、コネとカネがもつとも重要である。今回の出張でも、査証が取得できたのは、有力なコネのおかげである。

●文書とのつきあい方

文書を迂回する抜け道が増えれば、その対抗策として、文書主義は強化されるだろう。そうすれば、文書を介した公的ルートはいっそう険しくなり、抜け道の必要性はさらに高まるだろう。人間と文書のこのイタチごっこは、歴史を振り返れば、ラテンアメリカに限らず、地球上のいたるところで繰り返されてきたものではあるまいか。その出現以来、文書は人間に大きな利益をもたらしてきたが、その文書と上手につきあうことは、じつはたやすいことではない。

査証がようやく更新されて手元に戻ってきたパスポートを見ながら、そんなことを考えさせられた。



査証の更新に関する書類

さいとう あきら
齋藤 晃

民博 先端人類科学研究部

平成二六年から二〇年にかけて機関研究「テキストの構築」を実施し、人間と文書の関係を学際的に究明した。現在、その成果をとりまとめ中。